【再録】ノーカウント

夢二

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=13912558

ドラクエ11, DQ11, カミュベロ, カミュ, ベロニカ

DQ11カミュベロ。
2020年2月発行のカミュベロ小説合同誌『アレキサンドライトをみつけて』寄稿作品の再録です。
四人パーティ結成から、裏面に入って空飛ぶ乗り物が覚醒した後まで。出会って早々の事故をきっかけに、カミュの唇に意識を囚われていくベロニカの話。
テーマは「秘密」でした。

n年振りの紙媒体に大層緊張し散々悩んだ挙句、王道路線に落ち着きました。
ひみつ、って良いですよね。可愛さも切なさも色っぽさも全部詰まっている気がします。

通販もまだ続いているそうです。残部僅少とのことですので、気になる方はお早めに。
ここでしか読めない（かもしれない）主催さま方の後書きは必読です…！
https://ecs.toranoana.jp/joshi/ec/item/040030811011/

Table of Contents

【再録】ノーカウント

　子供の身体とはかくも不便なものだったのか。草もまばらな荒野を歩むベロニカの足取りは、前向きな気持ちに反して重かった。
　ヒノノギ火山からの噴出物が堆積した土壌は赤みが強く、地熱に耐え得る草木だけが這うように縄張りを広げている。一度ならずと通った道のりであるにも関わらず、全くの別物になってしまったかのような錯覚に陥る。
　捕らわれた地下迷宮から逃げ出す時は必死だった。セーニャと行き違いになったと知った時も、心配が先に立った。そして何よりも、奪われた魔力と共にこの身から零れ落ちた時の砂も返ってくると信じていた。
　手にしっくりと馴染んだはずの愛杖は、ふくふくとして尺の足らない指を突っぱねるように重い。赤い法衣は縮んだ身体にぴったり寄り添ったというのに、この天才魔法使いにあっても思いも及ばなかった現象が起こるものだと、改めて驚愕する。それはまるで、取り戻した魔力と取り戻せなかった肉体に、所有物がそれぞれ呼応したかのようであった。
「おい、それ持ってやろうか？」
　しんがりを務めていたカミュが、肩越しにベロニカの掌中を指す。
「気持ちだけ頂いておくわ」
「強がんなよ、チビ。さっきから引きずってるぜ」
「子供扱いしないでって言ってるでしょ。大体、魔法使いの杖は使い手の魔力を増強するようにできてるの。取り上げたら戦力半減だわ。アンタってホント考えなしね」
「へいへい……分かったよ」
　果たしてどれだけ理解しているのか、魔術の類には疎そうな男は、気のない返事をして手を後頭部で組んだ。
　古の伝承を語り継ぎ、勇者を守り導く聖地ラムダの民、ベロニカと双子の妹セーニャは、ついに探し求めていた勇者との邂逅を果たした。虹色に輝くという命の大樹の枝の手掛かりも得た。吉事に恵

まれ、曖昧模糊としていた先行きに一筋の光明が差したところである。肝心の勇者さまが大国デルカダールのお尋ね者という、不都合極まるオプション付きではあるけれど。
　目標の定まった旅路は、あてどのないそれよりも実に軽快である。それなのに、身軽になったはずの身体は、荒野から土竜のように顔を出した岩石を思わせるほどに重い。
　山里育ちゆえ体力にはそれなりに自信があったはずなのに、思い上がりだったろうか。子供の頃はおどろおどろしく思われた獣道が、大人になってみれば気軽に道草できる脇道であったように、成人を迎えいよいよ溌剌とした輝きに満ちた娘にとっては、幼少時の頼りなさなど既に忘却の彼方だった。
「じゃあ杖はお前が持て。代わりにお前をオレが持つ」
「はあ……っ！？」
　申し出の内容を飲み込む間もなく、ベロニカの身体は男の肩に担ぎ上げられる。まるで物のような物言いをされたのが自分だと理解して、ベロニカは脚をばたつかせた。
「ちょっと！　どこ触ってんのよ！　レディに対して失礼よ！」
「本当にレディならちっとは大人しくするんだな。裾、めくれてるぜ」
　悲鳴を上げて手で腰を押さえようとした途端、ぐらりと上体が傾ぐ。
「あっぶねえな」
　呟きに反して危なげのない手つきで背を支えられ、ベロニカはそろりと男の首に腕を回した。
　くっきりと斜めに筋の走ったそれは、男にしては細いのかもしれない。勇者の肩書きから想像されるような偉丈夫とは程遠い、中性的な容貌のイレブンであっても、田舎育ちらしい頑健さが備わっている。しかしカミュは、骨格から無駄を削ぎ落とし、筋肉と皮だけを張り付けたような体つきをしている。不安定な岩場をカミュの足が踏み締める。弾みで唾を飲んだ喉仏がこくりと動き、ベロニカは慌てて目を逸らした。
　この歳になって、こんなに間近に異性を感じることなどなかった。

進行方向を振り向けば、裾をたおやかにつまんだセーニャが、イレブンに手を取られて岩場を上がっていく。
　本来であれば、自分があそこにいたはずなのだ。いつだって、先を行くのは自分だった。
「……妬いてんのか？　悪かったな、勇者さまじゃなくて」
「……っはあ！？」
　つくづく理解に苦しむことばかり言う男だ。さも乙女の憧れとばかりに勘ぐられ、ベロニカの胸中は燃え盛る火の如くであった。
　勇者は庇護の対象だ。守られたいなどと思うはずがない。それを安易に男女関係に置き換えて想像するのも失礼極まりない。そして何よりも。
　双賢の姉ベロニカは、恋なんてしない。
　この身と魂は全て、果たすべき使命のためのものだ。
　恨めしいのだとすれば、それは、先導者としての役目を果たせず後塵を拝する自分自身に向けてのものだった。
「あんまりふざけたことを言ってると、アンタのその目立ってしょうがない髪を焼き尽くすわよ」
「馬鹿、余計目立つじゃねえか！」
　呪文を口の中で転がし始めると、カミュはさすがに慌てた様子で身を反らす。
　タイミングが悪かった。踵の下で風化した足場が崩れ、カミュはとっさに爪先に重心を揺り戻す。ちょうど魔力の集う右手を天にかざしたベロニカは、身体の平衡を失って大きくのけぞった。
　カミュの手が叩きつけるようにベロニカの背を押さえる。さながら振り子のように、彼女は今度はカミュの肩口に勢いよく飛び込んだ。
　柔らかい。
　衝撃に耐えんと目を固く瞑ったベロニカが、最初に感じたのはそれだった。骨と皮と筋肉だけでできているような男が、こんなに柔らかいとは思わなかった。それとも意外と隠れ脂肪が付いているのかしら。一年間も牢獄にいたと言っていたし、きっと運動不足なんだわ。
　そんなことを思いながら、ゆっくりと瞼を持ち上げる。すると、

目に入ってきたのは思いがけない光景だった。
　一面に広がるのは、彼の肩越しに見えていたはずの赤茶けた荒野ではなく、肌の色だ。日に焼けにくい頬の外側は思いの外白い。案外きめも細かい。男のくせに。ろくに手入れもしていなさそうなくせに。何だか悔しい。
　瞳の色は抜けるような青空。子供の背丈では遠すぎて気付かなかった。それは人目を忍ぶ盗賊稼業には不釣り合いの、鮮やかに目を奪う髪の色と同じだった。
「…………え？」
　何かがすとんと腑に落ちる。違和感の正体が氷解する。勢いよく顔を引き剥がした拍子に、控えめな弾力が唇を押し返した。
　唇。そうだ、くちびる。口の上下に備わった赤い粘膜。
「──じゃなくて！　あ、アンタ……今……まさか……！！」
　青ざめて震えるベロニカを尻目に、カミュは一度ぱちくりと瞬きすると、飛ぶ虫でも払うかのような軽い手つきで唇をひと撫でした。
「当たったな」
　決定打をあっけらかんと言い渡されて、血の気が多い自覚はあるベロニカですら、全身の血がさあっと引くような感覚に陥った。動悸がする。眩暈がする。呼吸が上手くできない。
「あ、あたし……あたし……初めてだったのに……」
「……そうか。そりゃ運が悪かったな」
「大体アンタ何でそんな平然としてんのよ！　キッ……キスは大切な人とするものでしょう！？」
「ませたことを言うお嬢ちゃんだな」
「あたしは大人だって言ってるでしょ！」
　信じられない、信じられない、信じられない。
　脳内を占めるのはその一言に尽きる。
　後生大事に守ってきたわけではないけれど、花盛りの乙女にとって、あっけなく純潔を失ってしまうにはあまりにも惜しい代物だった。
　それをこんな、出会って間もない、いけ好かない男に。
「これは事故よ！　断じて事故よ！」

「どっからどう見ても事故だろうが」
「アンタこのこと絶対誰にも言わないでよね！　絶対よ！」
「言わねえよ。そもそもお子さま相手だぜ？　ノーカンだろ、ノーカン」
　もう自分で歩けるな、と降ろされたのは平坦に舗装された街道だ。そろそろ関所が近いらしい。
　手をひらひらと振ってイレブンたちに近付いていくカミュを呆然と見送って、ベロニカは手の甲で唇をぐいとこすった。

＊＊＊

　何よこれ、何よこれ、何よこれ。
　泉の水で顔を清めながら、ベロニカは激しく動揺していた。何度洗い流しても、唇に残った感触が消えない。
　とうとう諦めて手巾で顔を拭う。あまり遅くなると、気分でも悪くなったのかと心配してセーニャが来てしまう。ただでさえ、砂漠に囲まれたサマディー領内では水は貴重だ。この泉も無限に水が湧き出るとは限らない。
「乙女の一度きりのファーストキスをノーカンだなんて……アイツほんとにサイテーよ」
　あの悪目立ちする顔立ちをした男のことだ。奴にとっては幾度となく経験した内の一回に過ぎないのかもしれない。前もなければ次の予定もないベロニカとは、一回の重みが違いすぎる。
「……そうよ。こんなことで悩んでどうするつもり？　ベロニカ」
　この唇は誰のものにもなり得ない。仮に目の前に子供扱いしない素敵な誰それがいたとしても、ベロニカには心を通わすつもりも、身を委ねるつもりもなかった。双賢の姉ベロニカは恋なんてしない。使命の障りとなる気持ちは必要ない。だったら、何をそんなに重大事に思う必要があるのか。
「元々いらないものを、アイツにちょっとくれてやっただけだわ」
　努めて軽い調子で鼻を鳴らして、ベロニカは立ち上がる。大切に思うのは、この使命を果たしてから。それでいい。
「ノーカンよ、ノーカン」

カミュの言い分を改めて反芻すると、意外や的を射ていることに気付く。
「だって、今のあたしは子供なんだから」
　まさにこの瞬間まで記憶の奥底に埋没していた出来事が脳裏に蘇る。そう、それは肉体のみならず、本当に幼かった頃の話だ。
　気の強い自分と違い、子供の時から大人しく女の子らしかったセーニャは、何人もの里の男子たちから好意を寄せられていた。その内の一人が、ある日抜け駆けをした。セーニャを驚かそうと木陰に潜んだベロニカに気付かずに、ぼくセーニャちゃんがすき！　と宣言したかと思うと、可愛らしく突き出した唇をセーニャに拙く押し付けたのである。
　純情無垢な幼女ベロニカは衝撃を受け、目にしてしまったことを親にもセーニャ本人にも言えずに悩んでいたものだが、大人目線で見れば何てこともない、子供時代の微笑ましい過ちのひとつである。当事者の二人も最早覚えてはいないだろうし、仮に記憶にあったとしても、微かな照れ臭さをまといつつ笑い飛ばすような出来事だ。そんなものまで数の内に入れられてしまったとしたら、堪ったものではないだろう。
　──そういうことなのだ。
「アイツも案外理にかなったことを言うのね。ちょっとだけ見直したわ」
　せっかく褒めてやったところで、肝心の聞く相手がいないのだから言い損である。
　ベロニカは自分の才覚に自信を持っていたが、常に知恵が働くと思うほどには自惚れていなかった。聡明な彼女は、時に心が恐れおののくことも、挫けそうになることも、千々に掻き乱されることも知っている。
　子供の姿と変じたのには、きっと意味があるのだ。
　荒野の地下迷宮の狭い脱出口から抜け出して、勇者と巡り合うため。彼女の人並み外れた才知に見合う、強大な魔法の習得に必要な時間を捻出するため。それだけではない。
　年頃の少女に降りかかり得る雑念を振り払い、一途に使命の遂行を果たすためでもあるのだ。……きっと。

「ノーカウントよ」
　水鏡には、波紋にぼやけていても判別できるほどの、小さく丸い輪郭が映っている。
　ベロニカはもう一度だけ、言い聞かせるように繰り返した。
　木登りは得意だった。岩から岩へ飛び移ることも。
　自分が特段運動能力に秀でているとは思わないが、ゼーランダ山の厳しくも豊かな自然に囲まれた聖地ラムダの子供たちにとっては、できて当たり前の遊びだった。
　もちろん、セーニャだって。
　控えめで鈍臭くて、一見するとか弱げなセーニャだが、山道に鍛えられた足腰の強さは自負するところである。事実、魔法の鍛錬にばかり時間を割いていた自分よりも遥かに、妹は好奇心旺盛で活動的なのだ。しかし他所の人に言っても大概、逆だろうと笑われて信じてもらえない。それだけ人の第一印象を覆すのは難しいものだと、ベロニカは常々思っている。
　つまり、誰かに手を取ってもらわなくても、セーニャは歩けるのだ。荒涼とした岩場も、足すくう砂原も、ぬかるんだ沼地も、本当は。
　イレブンも、あのカミュですら、女子供には優しくするのが当然とばかりに、何かにつけて手を貸そうとする。迷子になるなよ、おチビちゃん。そう言って半ば強引に手を引かれる度に、胸の内を小さな炎がちりちりと焦がしていく。
　その正体は知っている。嫉妬だ。実につまらない妬み嫉みだ。
　本当は導き手はあたしたちなのに。けれど、この尺足らずの子供の手は、大の男の手を引くには小さすぎる。
　心優しいセーニャは、差し出された手を拒みはしない。子供扱いしないでよね！　そう強がって突っぱねて、結局無様に小脇に抱えられる自分とは違って。
　ベロニカはシルビア号の甲板の柵にもたれ掛かった。
　本来の身長であれば胸元ほどの高さであるそれは、今のベロニカが背伸びをしても頭が出ない。
　乗り越えることができなかった。ダーハルーネでホメロスの追撃を避け、波止場すれすれに走るシルビア号に飛び乗ったあの時、ベ

ロニカは柵にしがみつくのが精一杯だった。本当に子供だった頃、山の中を軽々と飛び跳ねていたようには、身体は動かなかった。イレブンとカミュに引き上げられ、ベロニカは辛うじて甲板に這い上がることができたのである。
　精神や経験との同期を失った、形ばかりのこの肉体は、思うように動いてはくれない。
「…………カミュ。大丈夫かしら」
　イレブンを庇い人質となった男は、傷だらけで見るからに疲弊していた。助け出されて即座にセーニャが回復呪文を唱えたものの、万全とは言えない。シルビアに連れられて船室に向かって以降姿を見ていないから、きっと深い眠りに落ちているのだろう。
　口が悪く、人を子供扱いばかりする。人の話もロクに聞けないくせに、人の世話を焼きたがる。相変わらず癇に障る――けれど、頼りにしていい男なのだと、ベロニカはもう分かっていた。
　それでも、怪我人に余計な負担を掛けてしまったことに、ベロニカの胸は痛んだ。治りかけた腕を、肩を、また傷めてはいないだろうか。ああ、せめて、自分が軽々と甲板に飛び移ることができたなら。
　一行の船出を祝うかのように現れた見事な満月は、白み始めた空に淡く溶けかかっている。ベロニカは結局一睡することもできないまま、船が突き進む東の空をただ眺めていた。
「……おはよう。早えな」
　階段を上がる足音が聞こえる。振り向いたベロニカは、扉を開けて気だるげに伸びをしたのが、今まで思いを馳せていた当人だと知って、どきりと肩をすくませた。
「おはよう。……もう寝てなくて平気なの？」
　言い終わるか終わらぬかの内に、小さなあくびを噛み殺した彼女を見て、カミュは思い違いに気付いたらしい。
「何だ、夜更かしか。そんなんじゃデカくなれねえぞ、おチビちゃん」
　わざとらしく唇の端を吊り上げて、いつものように笑った。
　子供扱いしないでよね！　そんな決まり文句を、ついにベロニカは返すことができなかった。定番の応酬を期待したカミュの視線が

口元に向かうのを感じて、ベロニカは急速に唇の乾きを覚えた。
　拙い舌遣いでそれを湿らせ、ベロニカは対抗するようにカミュを見上げる。きゅ、と上向きに引かれたこの口角が下がる時、彼は何と言うのだろうか。デルカダール兵に縛られ殴られた時に噛み締めたのか、柔らかかったはずのそこは固くひび割れて、治りきらない傷口が熟したざくろのような赤い割れ目を見せていた。
「……責めないのね」
　痺れを切らしてベロニカは先に口を開いた。
「アンタが先を急ごうってずっと言ってたのに、あたしたちは……あたしは、お祭り気分で浮かれてた。お尋ね者になるって意味を分かってなかった。勇者さまを危険に晒して、アンタを酷い目に合わせた。勇者の導き手が聞いて呆れるわ。だから……ごめんなさい」
「……言いたいことはそれだけか？」
　カミュの声音はあくまでも穏やかではあったが、ベロニカに何かを促すように顎をくいと動かした。
　言えなかったこと、言わなければならなかったことは幾つもある。ベロニカは順番に思い起こす。たった数日間の出来事が、随分と長いもののように感じられた。
「そうね……まずは、杖を取り返してもらって悪かったわ。霊水の洞窟では、段差を抱え上げてもらって迷惑かけたわね。船に乗った時も、怪我人なのに手伝わせて申し訳なかったわ。それから……」
「あー……もうその辺でいいぜ」
　カミュは眉間に寄った皺を指で押さえると、反対側の手をひらひらと動かした。
「そういう時は、ありがとうって言うんだぜ」
　ベロニカは、はっと眠気から覚めたような心持ちで、口元に手を当てた。
　カミュの言い方は決して恩着せがましいものではなく、むしろ気のない様子から、それが彼の求めていた答えではなかったことが察せられたが、そんなことはどうでもよかった。その言葉は確かに、ベロニカの胸に響いたのだ。
　謝罪の言葉よりも、感謝の言葉の方がずっと気持ち良い。それは、子供にだって言って聞かせるような話だ。

「軽いもんだよ。杖も、お前も」
　カミュは口ぶりまでも軽い調子で身を返すと、ベロニカに並んで柵に寄り掛かった。
「大事なモン、もう盗られるんじゃねえぞ」
　この男は、ちゃんと分かってくれていたのだ。魔法使いにとっての杖の大切さを。ベロニカの魔法に懸ける矜持を。
　それをひけらかすでもなく、何てことのないように言うのが悔しかった。身体と一緒に心までも子供に戻ってしまったかのように、諭されて、教え導かれて。その悔しさが、情けなさや嫉妬から来るものだけではないことに、ベロニカは薄々気付き始めていた。
　大切なものは、もう盗られている。
　覆った手のひらに隠すように、指を微かに動かす。そろそろとその輪郭を辿る。花びらにも似て薄く頼りない、子供の唇の。
　語弊があるとカミュは言うだろう。盗ったなどとは人聞きの悪い。あれは単なる事故なのだと。
　事故だ。紛れもない事故だ。不意で不運な。
　無かったことにしようと何度言い聞かせても、意地悪な唇がベロニカへの煽り文句を紡ぎ出す度に、その挙動を目が追ってしまう。岩の間をくぐり抜ける魚のように、ゆらゆらと滑らかに波打つ、血の色が透けた薄い膜。
　ちゃぷん、とトビウオが跳ねる音が聞こえ、ベロニカは我に返った。
　疲れてるんだわ、あたし。
　下ろした手で柵をぐっと掴み、甲板を踏み締めてしっかりと立ち直す。
　見た目に惑わされずに大人として扱われるには、彼女の精神は未熟さを残しており、いっそ子供になりきろうと試みるには、成熟しすぎていた。
　カミュに、図らずも乙女の唇を奪ったことを認めさせたいのか、それとも記憶の海の底に深く沈め去って欲しいのか、もう自分でもよく分からなかった。
「そうだ、お祭り気分を味わい損ねたお子さまに、これをやるよ」
　ベロニカと視線を合わせるように腰を下ろして、とみに懐を探っ

たカミュが差し出してきたのは、愛らしい色柄の巾着に包まれた飴の詰め合わせだった。結ばれたリボンがよれているのは、無造作にポケットに突っ込まれていたからだろう。それも、おそらく長時間。
「これ……ダーハルーネで配ってた……」
　海の男コンテストを一層盛り上げるように立ち並んだ出店の中で、子供向けの玩具を取り扱っている店があった。そこで客寄せに配布していたドロップだ。女同士のショッピングには難色を示したくせに、欲しいもんがあるなら買ってやろうか、などと屋台の方を指差してにやにやと笑うものだから、怒りの鉄槌ならぬメラを食らわしてやったことも記憶に新しい。
「疲れた時には甘いもんがいいって言うだろ？」
　そんなやり取りも無かったかのように涼しげな顔でうそぶいて、ちっとも似合わない可憐な包みを手の中で放り投げる。
「アンタ、いつの間に貰ってきてたのよ……」
　町の賑わいを思うように楽しめなかったことに対して、一応気を遣ってくれていたのだと、ありがたく思うべきだろうか。
　しかし、胸によぎった感謝の念を押しのけて、ベロニカはふつふつと腹が立ってくるのを感じていた。
　馬鹿みたい、馬鹿みたい、馬鹿みたい。
　あたしばっかりこんなに意識して、こんなに悩んでいるなんて。
　カミュにとっては、本当に何てことのない出来事なのだと。どんなに自分は大人だと主張して抗ったところで、カミュにとってはおチビのお子さまにしか見えないのだという事実を今、嫌と言うほど思い知らされた。
　本物の子供相手のように忠言を呈され、しまいには菓子で釣られて。
「結構よ、子供扱いしないでよね！」
「何だ、いらねえのか」
　すげなく断られたにも関わらず、むしろその反応を待ち望んでいたとばかりに、打撲痕も痛々しい頬を持ち上げたカミュは、楽しそうに笑う。それが余計にベロニカを苛立たせる。
　落ち着きなさい、ベロニカ。

大きく息を吐いて頷けば、小さな靴が目に入る。息を吸って胸を反らせば、目線よりも高い柵がそびえ立つ。カミュの目が特別曇っているわけではない。誰が見ても、年端もいかない子供の姿がそこにある。
　だからまだ、花盛りの乙女の唇の純潔は失われていない。双賢の姉ベロニカは、誰のものにもなり得ない。全てが終わるまで、この身を捧げるのは使命だけだ。
「どうすっかな、これ……食いモンを無駄にするのは感心しねえしなあ……」
　床に座り込んだまま、指先にぶら下げた袋を物珍しそうにしげしげと眺めて、カミュが首を捻る。意外とそういうところは真面目なのね、と逆にこちらは感心する。単に、冷や飯続きの獄中生活を経ての境地かもしれないけれど。
　カミュが意味ありげにちらりと目配せした。ここで、やっぱりいるわ、などと言おうものなら相手の思うつぼだ。素知らぬふりをしたベロニカにつまらなそうに鼻を鳴らして、カミュは雑に封を解いた。
「んじゃまあ、食ってみるか」
　これがセーニャであれば、どちらから頂きましょうか？　迷ってしまいますわ！　などとぐずぐずしているところだ。しかし、甘いものを好んで食べそうにもない男は、さっさと一番上にあった赤い飴をつまみ上げた。
　あれはりんご味かしら、それともいちご味かしら。そんなことを考えながら、徹夜明けの重い目でぼんやりと飴の行方を追っていたベロニカは、あ、と小さな声を上げて固まった。
　骨ばった親指と人差し指が描く美しい円形。その切れ目に収まった艶めく球体。そこに寄せる唇の形。僅かに覗いた赤い舌。
　まるで、キスをするみたいだ、と思った。
　身体が衝動的に動いた。しかし頭は不思議と、時が止まって見えるかのように冷静だった。
　つるりと唇に吸い込まれそうな飴玉を唇で奪う。
　乾いてささくれ立った表皮とは対照的に、人肌の熱で溶けかけたそれは、なめらかにベロニカの舌に滑り落ちた。砂糖の甘さばかり

が広がって、味は分からなかった。
「……っ……おい……！！」
　飴玉は既に咥内にないはずなのに、カミュは飲み込んで詰まらせたような顔をした。
「…………お前、いいのかよ」
「やっぱり欲しくなったのよ。疲れた時にはいいわよね、甘いものって」
「いや、そっちじゃなくてだな……」
　困ったように、言葉を探すように、カミュの目が泳ぐ。いつもすまし顔の男の鼻を見事に明かして、ベロニカは胸がすく思いだった。
「何よ。まさかベロニカさまとのキスにドキドキしちゃった？　色男さん」
「はあ？　んなわけあるかよ。お子さまだぜ？」
「ならいいわね」
　立てた人差し指を唇に添えて、ベロニカは強気に笑った。
「ノーカウントよ」

　あの時の衝動が何であったのか、ベロニカは未だ答える術を持たない。ただ、睡眠不足の頭が見せた幻なのだと思うには、記憶は鮮明すぎた。
　飴が溶けゆくと共に、ゆるゆると甘い眠気に誘われて、気付いた時には船室のベッドの上だった。
　──……おい、ベロニカ。食いながら寝ると危ねえぞ。……しょうがねえなあ。
　そんな声が、聞こえた気がした。
　素敵な王子さまに見初められてキスを交わし、結婚してめでたしめでたし。それがおとぎ話のお決まりだ。女の子なら一度は憧れる幸せな物語。
　未だに夢見がちな恋愛小説を愛読するセーニャと違って、ベロニカは早々にその手の本を読むのはやめてしまった。幸せは自分の手で掴むものだ。王子さまが白馬に乗せて持ってくるものではない。とはいえ、ベロニカにも年頃の娘らしい憧れがないわけではなかっ

た。為すべきことを為したその後は、この人こそはと思える相手に出会えたならばその時は、身を捧げるのもやぶさかではないだろうと、漠然と思っていた。例えるならそれは、鍵の付いた小箱に収め、棚の奥に密やかに仕舞い込んだ、日頃は存在を忘れかけているような、けれどとても大切なもの。
　それをあっけなく暴かれて、それどころか自ら進んで差し出そうとしているとは。ベロニカは自分で自分が信じられなかった。
　妹には言えない。恋人ならざる男と、一度ならずと口付けを交わしたことを。事故だけならまだしも、その後は自ら口付けたことを。更にその相手が、仲間のカミュであるということを。
　誰にも言えない。これは、二人だけの秘密だ。
　誰にも言わないという約束を、カミュは律義に守っている。もっとも、幼女とキスをしました、などと言おうものなら、圧倒的に分が悪いのは彼の方であるが。
　おかしなことになっている。その自覚はあった。
　だから彼女は言うのだ。所詮子供のやることだと。男女関係に結び付く何かではないのだと。ただ、すれ違いざまにぶつかった指先のように、皮膚と皮膚とが触れただけなのだと。
「ノーカウントよ」

　相手の正体を知らないから怖いのだと彼女は思う。知識と経験によって、未知への恐怖は克服できると、少なくとも軽減はできると、彼女は信じている。
　例えばカミュと二人きりになった時、ベロニカは不意に訳もなく、あの日と同様の衝動に襲われる。
　時に湿り、時に乾き、いつも辛辣で、たまに優しい。変幻自在で不可思議な生き物が、彼女の視線を絡め取り、意識を釘付ける。
　初めの頃こそ躊躇いを残していたが、それもじきに薄れた。
　語らずして誘う唇を自らのそれで封じてしまえば、もやもやとわだかまる気持ちがすっと薄れていくことを知ったからだ。
　訳が分からないから気に掛かるんだわ、と彼女は思う。いざその動きに寄り添い、温度を直に感じてしまえば、実は恐れるに足りないものだと気付く。

もしかして、カミュもそのことを知っているから、いつも動じないのかしら。そんなことを思い、ではどのような経緯でそれを知るに至ったのかと想像する段になって、ベロニカは再び後味の悪い何かがせり上がってくるのを感じ、自ら思考を断ち切った。
　ちょっと助けられてキスをされた程度でときめいて、人を好きになるなんて馬鹿げている。そんなのは、おとぎ話の世界だけの話だ。
　だってほら、今の自分は動悸も火照りも和らいで、凪いだ海のように穏やかな心をしているのだから。
「……危なっかしい奴だな」
　吐息を感じる距離のままで、カミュの声がベロニカの唇を震わせる。
　その日のキャンプの食事当番はカミュだった。ある者は足りない薪を拾いに走り、またある者は水を汲みに行った。火の前には二人しかいなかった。立ち上る匂いに誘われて、ベロニカは味見をするカミュの隣に近付いた。小皿に寄せる俯きがちな横顔を、その唇の形を、見ていた。すすろうとしていた熱々の煮汁ごと、ベロニカは吸い取った。
「あたし、熱いのは結構平気なのよね」
「猫のくせにか？」
「それは着ぐるみでしょ！」
　ベロニカに絶対似合うと思うんだ。鍛冶台で最高位にまで打ち直した着ぐるみをしっかと抱えた勇者さまに、そんな澄んだ目で懇願されては断り切れない。口ではうるさいことも言っておきながら、何やかやと受け入れてしまうのが彼女の優しさである。
「……っと、そうじゃなくてだな……」
　喧嘩腰のやり取りは、既に二人の定型文になっている。条件反射で煽り文句を口にしたカミュは、首を振って話の軌道修正にかかった。
「男相手だってこと忘れんなよ。大人のレディならな」
「おチビのお子さまなんでしょ？」
　日頃の言い分を反芻すると、カミュは苦い顔をした。
「ヤケ起こすなよ。お前、見ててハラハラする」

「ドキドキの間違いじゃないの？」
「あーあーそれでいいよ。いたいけな幼女が男と見れば誰にでも襲い掛かる淫行魔にならねえか、兄ちゃんは心配でドキドキするぜ」
「ヤケ起こしてるのはアンタじゃない」
　あからさまに棒読みの台詞に、ベロニカはくすりと微笑んだ。
「ねえ、カミュ。あたしは今、とっても安らかな気分よ」
　カミュが何かを言いかけて、飲み込む気配がした。

　仕掛けるのはいつもベロニカからだ。カミュはあくまでも自分から手を出してはいないという一線を守り、ベロニカの衝動を受け入れるに徹している。それも当然だとベロニカは思う。こちらは外見上、誘う要素も惑わす要素も何もないのだから。
　だがカミュは拒みもしない。おそらく、かつて彼自身が言ったように、彼女も繰り返し告げたように、数の内に入っていないのだろうと思う。初めこそ戸惑う様子を見せ、彼女も一泡吹かせたつもりでいたのだが、すぐに手慣れた様子で、じゃれつく子猫に舐められた程度の気兼ねなさで、泰然と受け止めている。
　カミュは焦らず咎めない。けれど時折今のように、何かを諭すような目でこちらを見る。
　ただ一度だけ、彼が冷静さを失った、あの時以外は。
　氷が溶ける。時が動き出す。
　世界で最も美しいと謳われるクレイモラン城下町は、雪解け水が流れ込んだ沢のように、清くまばゆく輝いていた。
　魔女の恐ろしい所業を知ることなく息を吹き返した街の人々が、一様に日々の営みを再開する様は、一斉に草木が芽吹く春の訪れを思わせる。
「まだこんなに雪が積もってるのに、おかしいわね」
　誰に言うともなく独りごちて、ベロニカは雪に埋もれかけたブーツをぐっと引き上げた。
　雪深き王都は、整備の行き届いた城壁内で日常生活が完結するように設計されている。その反面、城壁の外は一面の銀世界だった。
　氷の魔女リーズレットの奸計を打ち破り、目的であったブルーオーブを手に入れて、いざ命の大樹への道を開かんと、一行の意気

は揚がる一方だった。
　──ただ一人を除いては。
　固く城門を閉ざしていた氷が溶けてもなお、彼の心は開かない。
　北国の冬の日暮れは早く、きらめく街は青ざめた空気の中に沈んでいく。人の往来がない街外れでは、白く煙る息遣いすらしんしんと降り積もる雪に吸い込まれ、身じろぎも許さないほど張り詰めた静寂が、本能的な恐れを呼び覚ます。
　ぶるり、と身震いしたベロニカは、赤ずきんの雪化粧をぶん、と振り落とすと、その勢いのままに次の一歩を踏み出した。
　あたしは怖くなんてない。ここが寒すぎるだけだ。
　……仮に恐ろしいのだとしても、相手の懐に飛び込んでしまえば、道は開ける。

　城門のすぐそばに教会があるのに、誰がこんなところに女神像を建て、祈りを捧げたのだろうか。長い航海の無事を祈る漁師か、それとも商人か。港を有する入り江の端にひっそりと佇んだ像の足元から、焚火が上がっている。航路を導く灯とするにも、冷たい潮風に晒された身体の暖を取るにも、あまりに心許ない小さな炎。
　カミュはその前に座り込んで手をぼんやりと当てながら、虚ろな瞳で黒い海を見つめていた。
「アンタ、こんなところで何してるのよ！？」
　この地方の寒さを甘く見て、凍死する旅人もいると言ったのは、彼自身ではないか。
　アンタがそれを実証してどうすんのよ！　叫び出したくなる気持ちを抑えて、ベロニカはずいずいとカミュに迫り行く。
　守るべき勇者を死の恐怖に晒した白い魔物。もしカミュまで、その手にかかったら。
　さもすれば震えそうな声を精一杯張り上げて、ベロニカは胸を反らした。
「ベロニカさまの大活躍を、アンタに見せてあげられなくて残念だったわ」
　王座の間で再度一行を欺こうとした魔女の計略を破った経緯を説明し、ベロニカは壁の向こうにそびえる城を指し示す。

「女王さまから、お礼に宴に招待されているの。アンタも来なさいよね」
「……気が乗らねえ。お前らだけ行ってこいよ」
　カミュはベロニカと目も合わせず、追い返すように手を払った。
　そんなことで怯むベロニカではない。構わずカミュの面前に立ちはだかる。
「じゃあせめて町に入ったら？　宿は取ってあるわよ。雪国の建物って中はとっても暖かいのね。あたし、びっくりしちゃったわ」
　ふうん、と驚きの感じられない相槌だけ返して、カミュは火に薪を放り込んだ。
「……何があったか知らないけど、こう見えてアンタにはちょっとは期待してるの。いざ命の大樹に勇者さまをお連れしようって時に、風邪でも引いて寝込まれたんじゃ敵わないわ」
「なら寄り道なんかしないで、とっとと向かおうぜ。ブルーオーブは手に入れたんだろ？」
　どこまでも城下町に入ることを忌避するカミュに対して、ベロニカの吐いた溜息は雪玉のような白い塊となる。
　クレイモランに向かうと決まった時から、カミュはおかしかった。物思いにふけることが増え、明らかに口数が減った。
　誰も口にはしないけれど、きっと気付く者は気付いている。ぼんやりとしたセーニャやイレブンに関しては、どうだか分からないけれど。
「……何かあったと思うんなら、ほっとけよ。それが大人の気遣いってやつだろ、おチビちゃん」
　一人になりたい気分なんでしょ。そう言って小さく肩をすくめたマルティナの対応こそ、彼の言う大人の気遣いなのだろう。
　どんな人でも、そういう時あるじゃない。そのとおりだと、ベロニカは一度は納得した。納得させようとした。けれど駄目だった。
　彼が気を楽にしたいというよりも、むしろ自らを追い詰めたがっているように、痛め付けたがっているように、ベロニカには見えたからだ。
「大人なら、そうかもしれないわね」
　子供の見た目を逆手に取って、ベロニカはしらを切る。彼女の

真っ直ぐで世話焼きな気性は、思い悩む仲間をみすみすと見過ごせるようにはできていなかった。
「……へえ？」
　カミュが上目がちに視線を上げる。その暗さに、冷たさに、ベロニカはぞくりと肌を粟立てた。
　こんなカミュは知らない。暗雲重く垂れ込める空の色。こんな彼の瞳は知らない。
　口は悪いが根は優しい。臆病なほど慎重だがいざとなれば思い切りがいい。つまらない揶揄を飛ばしては可笑しそうに笑う。果てなく高く、包み込むような空の青。それがベロニカの知っているカミュだった。
　ベロニカは初めてカミュを怖いと思った。
　脱獄囚だと、重罪人だと言われても怯まなかった心が、恐れをなした。
　鋭利な刃物を思わせる切れ上がった双眸、通った鼻筋。頑なに引き結ばれた唇は血の気を失い、青白い三日月のようだ。
　こんなカミュは知らない。知らないものは怖い。ならば知ればいい。
　ベロニカは己を奮い立たせると、腰に手を当てて胸を張った。
「もうっ！　これからって時に珍しくウジウジしてんじゃないわよ！　悩み事があるならあたしたちを頼りなさいよ！」
「……お前がそれを言うのか？」
「どういう意味よ？」
　カミュが前傾させていた上体をゆらりと起こした。近付いた距離のままに、二人はしばし睨み合う。カミュは答えず鼻を鳴らして、わざとらしく顎を突き出した。
「お節介って言うんだよ。ったく、ベロニカはお子さまのくせにババアみてえだな」
「ば、ババア……ですって……！？」
　やっと大人だって認めてくれたのね、と喜ぶほど、彼女は能天気でも愚かでもない。聞こえよがしの悪態に、ベロニカはついにカミュの胸倉を掴まんばかりに言い募った。
「カッコつけてつまらない意地張ってんじゃないわよ！　人様に気

を遣って欲しいなら、まずは気を遣わせないように自分が努力すべきでしょう！？　でも、それができないからって誰も責めたりなんかしないわ。自分一人で抱え切れないくらいに辛いなら、支え合えばいいの。だってあたしたち、仲間でしょう？」
「黙れ」
　腹の底から絞り出したような低い唸り声と共に、ベロニカは強く襟を引かれた。視界が傾ぐ。次の瞬間、口元に鈍い衝撃が走った。
　強引に押し塞がれた唇。言葉の続きは細い白煙となって散りゆく。
　固く握った雪玉を押し付けられたかのような冷たさに、こわばった唇がじんじんと痛みを覚えていく。
　カミュからの初めての口付けが、こんなに血の通わないものであるなんて。
　伏し目がちな長い睫毛には霜が降り、瞳の色を覆い隠す。ベロニカはその内側を覗き込むことを諦め、瞼を閉じる。誰にも言えない青年と幼い少女の歪んだ触れ合いに身を任せる。心だけを置き去りにして。
　あたしたちは秘密を共有しているようで、何も知らなかったのだ。
　自分を突き動かしてきた衝動の正体に思い至って、ベロニカの胸は打ち震えた。
　あたしは彼のことを知りたかったのだ。固く結ばれた唇を割って、その向こう側を知りたかったのだ。上辺ばかりの温度や仕草を知るよりも、ずっと、もっと、深く。
　あの唇の奥の秘密を暴くことができたなら。氷に閉ざされた彼の心に熱い炎を差し入れて、そっと溶かし出すことができたなら。
　けれどベロニカは知ってしまった。炎を燃やすだけでは、彼の心は溶けない。
「……そうね、余計な事を言ったわ。ごめんなさい」
　カミュの胸を押し離して、ベロニカは頭を下げる。眼球に薄氷が張っていくのを気取られないように、そのまま赤ずきんの尾を翻した。

雪道をこけつまろびつベロニカは走る。
　助けるつもりが傷付けた。時を待てば開いたかもしれない鍵を壊した。
　でも、これで良かったのだ。大人の気遣いなどできない子供で良かったのだ。深入りしたら最後、この雪と同じように足を取られて、きっと抜け出せなくなる。
　双賢の姉ベロニカは、誰とも心を通わさない。使命の障りとなる気持ちは必要ない。
「……ノーカウントよ」
　呟きは、降り積もる白に吸い込まれて消えた。
　ここは静かすぎる。命の大樹の足元に密やかに佇む美しき聖地、ラムダに足を踏み入れる度、カミュは思う。
　彼の故郷の長い冬のように、生物の営みの気配を覆い隠し、温度を奪いゆく不気味な静寂ではない。むしろ鳥のさえずり、風のそよぎ、木々のさざめきに耳を傾けるために、人々がそっと息を潜めたような、そんな穏やかさが流れている。
　それでもカミュは、この静けさが好きになれない。気を散らすものが何もないと、嫌でも彼女のことばかり考えてしまう。
「……ベロ、ニカ」
　粘った唾液が喉に絡み、情けなく声がつかえる。その名前を発音したのは、ひと月振りのことだった。
　双子の生家に辿り着くと、在宅していたのはセーニャ一人だった。
「親御さんはどうした？」
「今日は所用で外しておりますわ。お気になさらずどうぞお上がり下さい。今お茶をお出ししますわ」
「いいって、いつものことだろ。すぐに行って帰るさ」
　カミュが玄関先で固辞すると、セーニャはそれ以上勧めることなく頭を下げた。
「カミュさま、いつもありがとうございます。お姉さまの月命日に参って下さって」
「まあ、オレはラムダから一番近い場所に住んでるし、他の奴らと違ってご立派なお役目もねえからな。何てこたねえよ」

花を持たない左手を掲げて、カミュは双子の家を後にする。セーニャの髪はまた少し伸びたようだった。このまま伸ばすのか、それとも切り揃えるのか、聞く勇気はまだない。
　カミュとベロニカは志を同じくした仲間ではあったが、身内ではない。それ以上の何者でもない。毎回墓参りの前には彼女の実家にひと声掛けるのが、カミュの思う他人としての最低限の礼儀だった。
　彼がかつて生きていたのは暴力的な世界だった。無残に打ち捨てられる遺体を見た。しかし時には義理堅い世界でもあった。丁重に葬られる遺体も見た。
　けれど、記憶にあるどんな死にも、こんなに残酷で、誇り高いものはなかった。
「亡骸のひとつもねえのにな」
　里の外れの森の中、まだ新しさの残る墓石が木漏れ日を反射して輝いているのは、先にやってきたセーニャが磨き上げたからだろう。既に手向けられた花の上に、提げてきた花束をそっと重ねて、カミュはひざまずいた。
「……どこに行っちまったんだよ、ベロニカ」
　ベロニカは逝ってしまった。
　本当のことを、何もかも隠したままで。
　彼女を、失われた全ての命を取り戻すため、勇者イレブンは時を渡った。その後幾月も経ったが音沙汰はない。彼もまた、どこへ行ったのか分からない。
　黄金の呪縛から解き放たれた妹マヤの存在だけが、カミュをこの世界に繋ぎ止めていた。彼の人生において数少ない大切な友人を二人も失い、カミュはただ、繰り返される日常を、幼い頃から望んでやまなかったはずの自由で平穏な日々を、惰性で過ごしていた。
「結局オレは、お前のことを何も知らなかったな」
　双子の両親や、里の人々から聞く生前のベロニカの姿。大人の、彼女の姿。
　セーニャの面差しをあの勝ち気な眼差しに置き換えようとしても、どうしても上手くいかなかった。
　カミュとベロニカはただの仲間だった。それ以上の何者でもな

かった。けれど、世間並みからは外れた人生を歩んできたカミュにだって分かる。ただの仲間はキスなどしない。
　始まりは不運な事故だった。カミュにとっても、他人との口粘膜の接触が必ずしも気持ちの良いものとは言えない。ベロニカのために弁明しておくが、それは相手を問わず、だ。はなから双方そういった関係を求めているならいざ知らず、ましてや出会って間もない、得体の知れない相手であるならば。
　せめてもの救いは、相手が若い女であることだった。……それが若いというよりは遥かに幼い、小生意気なガキであったとしても。起きてしまったことは仕方がない。そう思える程度に溜飲が下がったのは否定できない。これが仮に、加齢臭漂う脂ぎったおっさんであったなら目も当てられない。男は誰とでもキスができるとはよく言ったものだが、大きな間違いである。最低限は選ばせて欲しい。
　ある程度場数を踏んだ自分ですらそうなのだから、ベロニカの打ちのめされようといったら、その比ではなかった。
　こちらに非があると言われるのは心外だが、初めてだったのに、と呆然と呟いた幼子がさすがに不憫で、極力気に病ませないように軽く流したつもりだ。それが逆に、負けず嫌いのベロニカの癇に障ったらしい。
　東へ行く船の舳先、波の上、カモメの声。首尾よく飴玉を奪い、勝ち誇った彼女の顔。
　故人との思い出は日を追って遠ざかる。どんな表情をしていたのか、どんな声をしていたのか、忘れたくなどないのに、無情にも白い霧は記憶の森を侵食していく。けれどその瞬間ばかりは、切り取られたかのように今でも鮮やかに蘇る。
　昇る朝日が水平線上に赤い光線を放射していた。いたずらを成功させた悪童の、ふてぶてしい立ち姿の背後に、鮮烈な輝きを見た。白く浮き上がった輪郭線は、小さな身体一杯に快活さと自信を溢れさせた娘の形をしていた。一方で逆光が、幸福そうな丸い頬に強い陰を生んだ。寝不足を色濃く映す目元の隈が、無垢な幼子には似つかわしくない憂いを生み出していた。
　――あの女は、誰だ。
　その問いの答えは分かりきっていた。目の前にいる、仲間の、小

生意気なチビのベロニカだ。なのに、違う、と叫び出したくなる衝動に駆られて、カミュは声にならない声の詰まった喉元が熱くなるのを感じた。
　子供は決して、あんな顔はしない。
　本当は大人だという彼女の言い分を、信じていないわけではなかった。達者な口ぶり、堂々たる呪文詠唱、小さな身体で誇らしげに大杖を掲げる姿。それでも実感が湧かなかったのは、意地っ張りで可愛げがない子供ならよく知っていたからだ。
　無理をしていることにはとっくに気付いていた。身の丈以上ある杖を引きずっているのに、こちらを頼ろうともしない。
　元盗賊などという後ろ暗い男に、貴重品は預けられないというのであれば、まっとうな心掛けだと言えるだろう。しかしベロニカの言動は、その点が問題なのではないと暗に伝えていた。
　──そんなにひよっこかよ。
　妹相手にしていたように、仕方のない奴だと寛容に受け流すことができなかったのは、置き去りにしたままの彼女と重ねる後ろめたさがあったからだけではない。出会い頭のひと悶着については、物申したいところがあったからだ。確かにルコの件は早とちりだったかもしれないが、初対面の人間に罵られるほどの悪行とは思えない。一方的に頼りない人間と決めつけられるのは腹立たしい。
　厄介なことに、カミュはその生い立ちから、肉体的負荷を掛けられた子供を見過ごせない性分だった。しかし何度手助けを申し出ても、ベロニカは折れなかった。
　──言いたいことはそれだけか？
　それでも、ダーハルーネの一件はさすがに堪えたらしい。少しはしおらしい姿を見せたので、そこに揺さぶりをかけたつもりだったが、まだベロニカはなびかなかった。
　聞きたいのは謝罪ではない。助けを求める声だ。
　本当に素直じゃないガキだと、半ば感心、半ば諦めの気持ちで、カミュは揺れる波間を見やった。いっそ、そう来ないとベロニカではない、と思えるくらいには彼女の気性に馴染んでいたし、面白みすら感じてきていた。
　まさかその直後に、彼女に対する認識を改める事態に直面すると

は思わずに。
　逆光の中、憂いを帯びて蒼く陰った顔色に対して、人工的な飴の色を転写した唇がいやに赤く映った。勝ち気に引き上げられたはずのそれが、何故か泣くのを堪えているように見えた。
　その時カミュは悟った。彼女が甘えられないのは、ただの子供の意地っ張りではないのだと。
　恐れも苦しみも見せまいと、どんなに辛い時でも責務を果たし誇りを失わんとする、悲痛なまでに気丈な娘がそこにいたのだ。
　カミュが初めて正しく彼女を大人と認識したのは、その瞬間だった。
　――ノーカウントよ。
　そんな免罪符と共に繰り返される口付けは、世の恋人たちが言うような気持ちを通わすものではなく、むしろ心に蓋をする何かだった。
　おかしなことになったと思っていた。その証拠に、他言は慎む自分がいた。
　拒むことだってできたはずだ。けれど、何故かできない自分がいた。
　ふざけた真似はよせ、と口先ばかりは注意をしても、力任せに引き剥がせない自分がいた。
　彼女を失って初めて気付く。自分はずっと、あの唇を割らせたかったのだと。閉ざされたその胸の内の秘密を暴きたかったのだと。
　若返って良かった、だって？　そんなおめでたい奴がいるものか！
　どれだけ辛かっただろう。どれだけ不安だっただろう。自らの過ちで妹の五年間を奪ってしまったカミュにも、失われた時の重みは少しは想像できる。
　ベロニカは一度も泣かなかった。文句は多かったが泣き言は言わなかった。
　偉大なる魔法使い。全ての命の盾となり眠る英雄。どんな時でも絶望なんかしない、自信に満ちた瞳。それなのに今脳裏に浮かぶのは、杖にすがりつくように立っていた、小さく頼りない子供の姿

だ。
　ベロニカは、取り戻した魔力のみを頼りに立っていた。手放さない杖は、崇高な使命を負った彼女の力と誇りの象徴だった。それさえ失わなければ、彼女は毅然と立っていられたのだ。
　最後まで涙ひとつ見せることなく、彼女は使命を全うした。大木の下に座り込んで、眠るようにこと切れたベロニカの幻。残されたのは、主を失った杖だけだった。
　──あたしたちを頼りなさいよ！
　何もかも全部、挙句の果てには世界の命運まで自分一人で抱え込もうとしたくせに、人のことには口出しをするお節介な女。
「……今まで黙ってて悪かった。オレ、実は妹がいるんだ」
　この罪深き過去を、本当のことを、伝えることができないままベロニカは死んだ。何も言わなかったというのなら、自分も同罪だ。
　オレたちは秘密を共有しているようで、何も知らなかったのだ。
　聞く相手のいない打ち明け話をとつとつと続けながら、カミュは答えの返らない問いを投げ掛ける。
「なあ。お前にとって、オレは何だったんだ」
　ベロニカのキスは拙かった。ただ触れるだけの幼い口付け。頑なに引き結ばれた唇。その奥で、彼女はどれだけ歯を食いしばっていたのだろう。
　決して弱音を吐かないそこに割り入って、柔らかく傷付きやすい彼女の本音を引き出すことができたなら、何かが変わったのだろうか。
「……答えろよ。いつもやかましいお前が静かだと、調子が狂う」
　日が傾き、山深き里の空気は途端に温度を下げる。唇を寄せた墓碑は冷たい。
　口うるさいベロニカの小さな唇は、いつもよく動いて血が通い、温かかった。
　ただ一度だけ、力尽くで黙らせた、あの時以外は。
　もし駆け出す彼女を引き留めて、もう子供の真似事はよせと伝えることができたなら、こんな奇妙な関係も、あるいは。
「やっぱりお前、いっぺん泣かせてやればよかった」
　二度と泣くことのできない少女の代わりに、カミュの頬を一粒の

雫が伝い落ちた。
　昼前に雪は止んでいた。北国の儚げな日差しに、道端に寄せられた雪山がちらちらと控えめに輝く。
　教会の前で待っていたベロニカを見て、カミュは目をしばたたかせた。
「お前、ずっとここにいたのか」
　ベロニカが口を開くまでもなく、その佇まいから答えが是であることを悟った様子で、カミュは心持ち足を速める。
　断りもなくマフラーの緩みをぎゅうと締め付けられたベロニカは、もこもこの毛糸に埋もれた顎をぐいと押し上げた。
「神父さんとお話はできた？」
「……ああ」
「マヤちゃんのこと、看てくれるって？」
「そうだ」
「ほらね！　あたしの言ったとおりでしょ？」
「お前、それが言いたくて残ってたのかよ？」
　カミュは呆れと照れ臭さの入り混じったような複雑な表情をして、ベロニカを睨めつける。
「言い出しっぺが結果を確認するのは当然のことよ」
　対するベロニカは堂々と胸を張って、眉をそびやかした。
　クレイモランに、行ってくれないか。カミュが遠慮がちに、しかし確かな決意を見せてそう切り出したのは、預言者の啓示に従って天空の民と出会い、聖なる苗木の記憶を巡って邪神討伐の手掛かりを得た後のことだった。
　勇者イレブンは待っていたとばかりに大きく頷くと、クレイモランの外れ、風穴の隠れ家へとケトスを飛ばしたのだった。
　黄金化の呪いから解き放たれた妹マヤとの和解を果たしたカミュは、憑き物の落ちた晴れやかな表情で、改めてイレブンの力になることを誓った。邪神を討ち平和を取り戻すその日まで、マヤは故郷で兄の帰りを再び待つこととなったのである。
　今更バイキングの傘下に入る気は更々なく、かといって、五年の時を失い幼さを残したままの妹が一人で生活できるとは思えない。最後までイレブンに付き合い、恩に報いると決めたものの、カミュ

は気を揉んでいた。
　兄妹に身寄りがないことは聞いたばかりだ。他に少しでも頼れそうな人はいないのかと尋ねたベロニカに、カミュはしばし考え込んだ後、城下町の神父を挙げたのだった。
　ベロニカに背中を押される形で、カミュは神父に事情を告げてマヤの世話を頼み、快諾を得たのである。
　意を決して教会の扉を叩いたカミュを見届けて、仲間たちは街の賑わいに姿を消した。それは大人の気遣いであったが、ベロニカだけは一人残って彼を待っていた。
「マヤちゃん、すっごく可愛かったわね。あたしとも気が合いそうだったわ」
　慣れた足取りで歩き去るカミュに当たり前のように付いて回って、ベロニカは殊更明るい声を上げる。
　苦しい思い出があっただろう。悔しい思いも、恨みを抱くこともあっただろう。それでも彼はきっと、自分たちに辛く当たった者よりも、優しくしてくれた人たちに出会う方を恐れていたのだ。己の過ちを告白し、変わり果てた姿を晒すことに怯えていたのだ。
　肩の荷が下りた様子のカミュを背後から眺めて、ベロニカは密かに安堵の吐息を漏らした。
「……じゃじゃ馬同士、気が合いそうだな。確かに」
　うんざりとした声音で天を仰いだカミュは、けれどベロニカを追い返すこともなく、ざくざくと雪を踏み締めながら町の外に出る。
　どちらからともなく向かった先は、入り江の奥の女神像だ。昼間でも人気はない。しかしいつか誰かはそこにいたのだろう、焚火の燃え殻が細くたなびく煙を上げていた。
　世界各所に点在する女神像は、古の賢者セニカをかたどった、聖地ラムダの彫像を模していると伝え聞く。祈りを捧げるように習慣付いたベロニカが、手を組んでひざまずくと、隣に立ったカミュも小さく黙礼した。
　ベロニカが祈りを終えて立ち上がると、カミュが付かず離れずの距離を取る。決まりの悪い沈黙が流れ、ベロニカは垂らした指先をそわそわと擦り合わせた。手袋は祈りの前に外している。瞬く間に冷気に晒された素肌が疼くように痛む。

壮大な冒険と戦いの日々に忙殺され、二人の仲は傍目には変わらぬように見えた。しかし、この場に立つと嫌でも思い出す。荒々しく感情をぶつけ合いながら、決して交わることのなかった、冷たい夜のことを。
　どうしてここに来てしまったのかしら。ベロニカは考える。あの日の彼が苛まれていた罪。その償いにおける、最後の禊なのかもしれなかった。
「……最近やらないんだな、アレ」
　カミュが沈黙を破り、ベロニカは顔を上げる。
　首を傾げた彼女と目が合ったカミュは気まずそうに視線を反らし、言い淀む口元を覆った指先で唇に触れた。
「……何よ。アンタ、このベロニカさまにキスして欲しかったの？」
「ああ……いや、どうなんだろうな。なけりゃないで調子狂うだろ」
　珍しく歯切れの悪いカミュに、ベロニカはくすりと笑みを漏らすと、いつもの法衣と揃いのような赤いコートを翻して、彼に背を向けた。
「……もう必要ないと思ったのよ。だから、おしまい」
　カミュが息を呑んだ音がする。ベロニカは後ろの気配に極力意識を向けぬように、目の前で揺れる青黒い波に視線を集中させた。
　カミュは自分から心を開いた。その胸の内の秘密を告白した。だからもう、その唇を割る必要はない。
「……お前にとって、オレはもう必要ねえのか？」
　温度を失くした声が聞こえた。それは、いつかのような鋭さはなく、曇って欠けたなまくらなナイフのようだった。
「あの時のこと、まだ怒ってんのか？　乱暴な真似をしやがったって」
「違うわ」
「じゃあ」
　迫り寄るカミュを遮って、見返ったベロニカは首を横に振る。伸ばされかけたカミュの腕が、だらりと垂れた。
「……なあ。お前にとって、オレは何なんだ？」

ベロニカは答えない。答えられない。何故なら答えを持っていない。代わりに彼女は質問で返す。
「どうして今、マヤちゃんのことを教えてくれる気になったの？」
　カミュの目が二度瞬いた。そのまますっと細められたそれは、ずっと追い求めていた宝物をやっと手に入れたような、その喜びを噛み締めるような、丁重に慈しむような、そんな色をしていた。
「……お前が泣いたから」
「え？」
「ウルノーガの奴を倒した時、お前、泣いただろ」
　空恥ずかしい出来事を指摘されて、ベロニカの頬は微かに赤みを帯びる。
　彼女は易々と奇跡を口にしない。奇跡と呼ばれるものは全て、努力と信心の結実だと信じている。けれどその時だけは、仲間たちとその時を迎えられたことが、本当に幸せで、何物にも代えがたい奇跡のように思われたのだ。
「お前もこうやって、素直に感情を出すことがあるんだなって思ったら、オレも言わなきゃいけないような気になったんだ」
「何よ、あたしがいつひねくれてたって言うの？」
　歯に衣着せぬ、とはベロニカがよく形容される言葉のひとつだ。自分でも、言いたいことは臆さず言ってきた自信がある。それなのにカミュの語った認識は、そんな通説とは対極に位置している。
　まるで自分が自分でないようなむずがゆさを、腕を組むことで押さえつけ、ベロニカは唇を尖らせた。
「……本当は不安だったんだろ？」
　訳知り顔でカミュが言う。問い掛けるというよりは、確かめるように。
「子供になっちまって、身体も思うように動かなくて、それでも必死で戦ってたんだろ？」
　カミュが膝を突く。ベロニカと目線を合わせる。
「助けてくれって言えばよかったんだ。全部一人で抱え込まなくたっていいんだ。……ずっと、言いたかった」
　鎧の如く身を守っていた腕を撫で下ろされて、ベロニカは急に肌を晒されたかのように震えた。

「勇者さまを命懸けで守るっつったって、誰でも死ぬのは怖いよな」
「アンタも？」
「死にてえことも死にそうなことも山ほどあったが、死に切れなかったくらいにはな」
「…………そう」
「……お前が生きてて良かった。一緒にいてくれて良かった。これからも……一緒に生きてほしい」
　そんな大袈裟な、と一笑に付すところだった。あたしが負けるって言うの！？　と怒るところだった。けれど、何故か、あまりにもカミュの言葉が真に迫っていて、ベロニカは何も言えなかった。
　詰まる喉を堪えて浅い呼吸を繰り返すベロニカの頬を、カミュの指がそっと拭った。
「……泣けよ。子供は泣くのが仕事なんだぜ」
　免罪符を得て、あどけない大きな瞳からは涙がぼろぼろと零れ落ちる。
　これでは本当に子供になってしまったようだとベロニカは思う。
「もう……っ……あたしの本当の姿見たでしょう！？　分かったなら、いい加減子供扱いしないでよねっ……！」
「分かってたよ。……お前が大人だってことなんて、とっくに」
　照れ隠しに声を荒らげれば、いやに神妙な答えが返ってきた。
「ならあたしに言いたいことはないわけ！？　ベロニカさま子供扱いして誠にすみませんでした、とか！」
「……まあ、何だ。別嬪さんだって、思ったよ」
「なっ……！」
　まさかそこで素直に褒められるとは思わずに、ベロニカは盛大に動揺した。
「そ、そうよね！　当然だわ！　でも大体セーニャと同じでしょ？」
「いや。セーニャと似てるけど、違う」
　カミュは当然のように否定して、回想のベロニカに思いを馳せるように視線を彷徨わせた。
「あんな顔してたんだな、お前」

視界を覆っていた霧が晴れたといった様子で、カミュは笑う。そのあまりの清々しさに、ベロニカは目を見張った。
　この男にも、そんな表情ができたのかと思う。まだベロニカの知らないカミュが、きっと、もっと、沢山隠されている。
「アンタがあたしの何なのかは分からないけど、あたしはアンタのことをもっと知りたいって思うのよ」
「奇遇だな。オレもそんな気がしてきたところだぜ」
「そういうのって、何て言うのかしら？」
「さあな。知れば分かるんじゃねえの？」
「それもそうね」
　名前の付かない関係を曖昧なまま納得し合うと、二人は勿体ぶって居住まいを正した。
「大人扱いしてやるよ、ベロニカ。だから」
　子供には長すぎるペンダントの鎖を持ち上げて、カミュが乞う。指で挟んだ赤い貴石がきらめく。ウラノスから授かった宝玉であるにも関わらず、それは安っぽい飴玉の色を思い起こさせて、何だか可笑しかった。
「変ね。あたし今、すごくドキドキしてる」
　かつて感じたはずの安らぎは鳴りを潜め、胸は早鐘を打ち鳴らす。
「笑うなよ、オレもだ」
「キスくらい何度もしたのにね」
　気恥ずかしさを取り繕おうと笑い飛ばせば、思いがけず真剣な眼差しが異議を唱えた。
「違うだろ、初めてだ」
　カミュの端正な顔立ちが、残り一歩の距離を詰める。
　濡れたように艶めくティアドロップ。そこに寄せた唇の形。僅かに覗いた赤い舌。
「……ノーカウント、だろ？」
　その奥の秘密にどうしようもなく心惹かれながら、ベロニカは貴石に魔力を注ぎ込んだ。